

女御母氏在暗戸屋曹司、欲纏頭於予、予見其氣色直退、向陣仰此事之間、自彼曹司差從女令招若雄丸、若雄丸不進向、從女只持女裝空歸曹司見者有嘲色云々、參右府之間于時入夜自宅送書云、慮外有外人署女裝束置侍所、侍所人不取咎之、下人更指置東面高欄下、依無由緒不取入、使下人早遁去、此事甚奇云々、推量女御曹司人所作也、仍遣取示案內於說孝辨令入其車、件尙書與彼女御通家也、仍令志此送物無由緒之旨、令返却也、家女不取入件物馳送消息、時人稱之、後聞女御母氏依此事有怨氣、愁申院并左府云云、甚鳩僻也、

〔繁花物語 晚待星〕其頃朱雀○後後いせのたくせんなどいひて、藤氏のきさきおはしまさぬあしきことなりとて、うちおほとの教通藤原の御くしげとの子生まぬらせ給べしといふこといできて、七月ついたちごろといそがせ給はせに、六月廿七日長曆三年うちやけぬ略中はかなく月日もすぎて、うちおほとのみくしげとの、おはすにまゐらせ給ふ、宮の御こと嫁子崩宮のはせなきになをとの通頼はおぼしめしたり、ことしが廿六年にならせ給ける、としごろいつしかとおぼしめじける御ことにて、どの御こゝろをつくさせ給へり、

上皇養子爲女

入内儀

〔玉海〕承安元年十二月二日壬寅、此日於院白河殿上法住寺殿被定女御入内雜事略中此女御平入道清盛○後後也、而重盛爲子、又院白河爲子、依永久例實女白河上皇養子藤原公有沙汰、凡每事殊勝、以詞不可言莫言、十四日甲寅、此日院姫君子德入内也、略中入道相國女、法皇白河御養子、永久例云々、但彼者自誕生之昔有撫育之禮、隨又主上御孫也、仍於儀無妨、今度已可爲姊妹歟、尤以有忌如何、  
〔百練抄八高倉〕承安元年十二月二日、入道太政大臣清盛○平女子德爲上皇白河御猶子、參入今日被定入内事  
〔繁花物語 六耀く藤壘〕大殿道藤原の姫ぎみ子、十二にならせ給へば、としの内に御裳著ありて、やがて内條一にとおぼしいそがせ給ふ略中かくてまゐらせ給こと長保元年十一月一日のことなり、にようぼう四十人、わらは六人、しもづかへ六人なり、いみぢくえりと、のへさせ給へるに、